

方法二元論をめぐる 最近の規範論理学的議論⁰⁾(I)

守 屋 正 通

一 問題とその背景

一 問題

二 問題の背景

二 ポアンカレのテーゼに対する反例(1)

一 ギーチ第一推論

二 ギーチ第二推論

三 ブラックの推論………(以上本号)

三 ポアンカレのテーゼに対する反例(2) —制度と convention

四 サールの推論

五 ヒンティッカ第一推論

四 ヘァーのテーゼに対する反例

一 ダンカン—ジョンズの推論

二 ギーチ第三推論

三 レッシャー第一推論とカントの原理

四 ヒンティッカ第二推論

五 結 び

一 問題とその背景

一 問題

ポッパー (K. R. Popper) はある論文で次のように述べている。「倫理学に関する恐らく最も単純で最も重大な点は純粹に論理的な点である。

私が念頭においているのは、事実の陳述から命令、政策原理、目的その他非恒真的 (nontautological) な倫理的規則を論理的に導くことはできない、ということである。この根本的な論理的立場が理解された上でのみ、道徳哲学の真の問題を把握し、それらの問題の困難さを評価しうるのである。」と。¹⁾

このような論理的立場はヒューム (D. Hume) にその範を求めるのが通例であるが、²⁾ 今日ではそれをパラフレーズした次の二つのテーゼによって表現される。＜ポアンカレ H. Poincaré のテーゼ (以下、Pテーゼとよぶ。)＞ と ＜ヘアー R. M. Hare のテーゼ (以下、Hテーゼとよぶ。)＞ である。³⁾

- 1) Pテーゼ：規範的（評価的，命令的）結論は，少くとも一個の規範（評価，命令）を含まない前提群からは，妥当な推論によって導かれえない。
- 2) Hテーゼ：前提群の中の平叙的前提のみからは導かれえないような記述的結論は，その前提群から妥当な推論によって導かれえない。

換言すれば，Pテーゼは，ある評価とか義務の妥当性にとって何らかの事実の存在あるいは存在の必然性のみでは十分な条件とはならないことを，またHテーゼは，ある評価とか義務の妥当性にとって何らかの事実の存在あるいは存在の必然性は必要条件ですらないことを主張する。

ところで，Hテーゼは必ずしもヒュームの主張の忠実なパラフレーズではないように思われるのであるが，今仮に，P・H 両テーゼを擁護する立場を＜強い非自然主義 non-naturalism＞，Pテーゼのみを擁護する立場を＜弱い非自然主義＞と名づけ，他方，P・H 両テーゼに反する主張をなす立場を＜強い自然主義 naturalism＞，Hテーゼのみに反対の立場を＜弱い自然主義＞として想定すると，弱い自然主義と弱い非自然主義とは両立しうる。そこで，(1) 少くともこの弱い自然主義の立場は十分成り立ちうるのではないか，また (2) Pテーゼは二，三の点で制限的に理解する必要があるのではないか，というのが，本稿で示したいと思う論旨である。幸い，戦後いわゆる＜哲学的論理学＞というジャシルの開拓が活

激になってから、PないしHテーゼに対する反論がかなり盛んに行われてきたので、その議論を少し整理して、価値論の基礎に若干の照明を当て、方法論的にも実践的にも大きな意義を有するこの問題に一つの方角づけを試みたいと思う。⁴⁾

二 問題の背景

まず、戦後の自然主義的議論の歴史的背景と論理学的特徴とを概観しておこう。

戦後の自然主義的議論の尖兵とは言えないにせよ、大きな推進力となったのは、フレーゲ (G. Frege) の研究者でもある二人の分析哲学者ギーチ (P. T. Geach) とブラック (M. Black) である。実際ここでとり上げる論争の到る処に、ラッセル (B. Russell) 対フレーゲ＝ストローソン (P. F. Strawson) の論理学における論争がその影を落しているのである。⁵⁾

ブラックは、⁶⁾ 「事實的陳述のみからは事實的陳述のみが導かれうる。」という原理を〈ヒュームのギロチン〉と呼んでいるが、彼によるとこのギロチンを支持する二つの論拠がある。(1) 第一の論拠はさらに二つに別れる。一つは (イ)、いかなる用語も適当な定義をほどこして前提の中で用いられているか、用いられうるようになっていなければ、妥当な議論の結論に用いられてはならない、という議論である。ブラックによると、この場合、「妥当な議論」が「妥当な三段論法」を意味する限りではこの見解は正しいが、一般的には正しくない。実際、文「A ならば B。」(記述文) から文「B が行われてはならないなら、A に行われてはならない。」(規範文) が論理的に帰結する。また (ロ)、妥当な推論においては結論は前提に含まれている、という暗喩をかりた論拠も、⁷⁾ 結論は補充的な前提を追加することなく与えられた前提のみから導かれうるということを、誤解し易い形で表現しているにすぎない。例えば、「馬は動物である。」から「白い馬は白い動物である。」が推論できるが、⁸⁾ この場合、結論のすべてが文字通り前提に含まれているわけではない。

ブラックの立論の背景には、次のような逆説的事情がある。かつてフランケナ (W. K. Frankena) も指摘したように,⁹⁾ 存在言明から価値言明 (ないし規範言明) を論理的に導く最も単純で、しかも伝統的概念論理学のもとで支配的であった方法こそ、価値 (ないし規範) 概念の記述的概念による定義ないし意味分析を大前提として価値的 (規範的) 結論を求める方法であった。¹⁰⁾ しかしこの種の議論には多くを期待できないで、むしろヒュームのギロチンを強化する方向で論争が発展してきたという事情である。この方法の根本問題は、大前提における価値語の意味が何らかの記述的意味に剩すところなく還元しうるか否かにある。今、定義を規約的定義と本質定義に大別するとき、¹¹⁾ 例えば次のように言われる。すなわち、規約的定義を用いる推論では、大前提がそもそも価値語に対する意味の規範的措定となるのであるから、(規範的言明を結論とする) 推論の全体はその仮装した規範的命題に依拠することになる。従って、ヒュームの命題は支持されねばならない。(もつとも、この議論は誤っている。註(12)参照。) 他方いわゆる本質定義を用いる場合には、このような定義は (本質定義という) 仮定によって価値語の意味を正しく複製している筈で、評価と記述、当為と存在の間の論理的懸隔を架橋することは問題にすらなりえないし、また意味の規範的措定をするのではないから、その定義は規範原理そのものだという非難は当を得ないわけで、問題はむしろ価値的概念の本質定義の可能性そのものということになる、と。¹²⁾

周知のようにこの可能性を、例えばムーア (G. E. Moore) は根本から否認した。¹³⁾ 尤もムーアの議論にはいくつかの欠陥があり、例えば、定義はすべて誤謬であるという誤った議論、いわゆる〈定義主義者の誤謬〉の議論に陥ってしまった。¹⁴⁾ それというのも、彼の場合、「善い」といった価値語の非認識的意味 (noncognitive meaning) が価値語の (自然主義的) 本質定義で用いられる記述語の認識的意味 (cognitive meaning) では尽されないという肝心の点が議論の支点とならなかったからだ、といわれている。価値語は個有の特殊な言語機能、すなわち、ある行為を推称し、われ

われの行動を統御する機能を持つから、この機能を有しない他の語（例えば、記述語）によっては定義できず、このような定義は価値語からその個有の機能を奪うことになる。¹⁵⁾

このように〈定義からの議論〉は結局逆に、Pテーゼの最も説得的な論拠を提供することになったのであるから、ブラックが定義からの議論を斥けるのも蓋し当然であろう。

(2) ブラックがヒュームのギロチンの第二の論拠として挙げるのは、〈べし〉陳述は真偽値をもたないから、推論の前提としても結論としても用いえない、という議論である。しかし、同じく真偽値をもたない命令を用いて、言明された命令から言明されない命令を推論することは可能であって、例えば「顔を洗え。」と「顔を洗ったら朝食を摂れ。」という二つの命令から「朝食を摂れ。」という第三の命令を推論できよう。何故なら第三の命令に従うことなしには、先の二つの命令（の連言）に従うことはできないから、と彼はいうのである。¹⁶⁾

彼が念願にしているのは明らかに論理実証主義の主張であろうと推測される。われわれは日常、命令や規範の推論の可能性を暗黙裡には承認しているのであるが、その推論の可能性を理論的に説明する段になると、論理実証主義の主張に見られるように、手詰りの状態におかれてきたわけで、1938年頃から〈ヨルゲンセンのジレンマ〉の名を冠して、このような袋小路からの脱出が盛んに試みられたのである。¹⁷⁾ 察するところ、ブラックは真偽値の代りに、命令文に対してはその〈遵守値obedience value〉という意味値を宛行って、記述文の推論と類比的に命令推論を説明しようとしているのである。¹⁸⁾

他方、論理実証主義の主張によって陥った窮地からの脱出策として、倫理的言明にも一定の経験的内容を認め、かつ、経験的命題と倫理的言明との間にも一定の「論理的」関係が存在するが、その関係は従来論理学で扱われたような形成的（に厳密）なものではなく、実質的でルースなものであり、従ってその限りで、一定の合理的通用性を認められた通行証 (inf-

erence-license, inference-warrant) を用いて、経験的言明にもとづいて規範的言明を推論し（基礎づけ）たり、検証したりすることができるという考えから、——十分の説得力はないが、——演繹でも帰納でもない第三の推論に価値（ないし規範）推論の血路を見出そうとする一つの流れが存在する。トウルミン (S. Toulmin) 等である。¹⁹⁾ このような立場と比較した場合、ブラックは、規範的言明は事実によってサポートしうるし、それをサポートする推論は厳密（で、非概念論理的）な演繹推論だと考える立場にあるわけで、これが現在の自然主義的議論のまず一般的立場である、といえる。²⁰⁾

しかも、戦後の自然主義的議論の最も注目し得る特徴は、本章註5) および第四章— (2) において言及するように、論理実証主義が元来依拠したところの古典的記号論理学 (standard logic) のみならず、むしろその枠から色々の面ではずれるところの多彩な論理体系や論理的意味論 (logico-semantics) を積極的に駆使してゆこうという姿勢にあるといえよう。例えば①、多値論理学を含めて様相論理学、命令論理学 (imperative logic)、規範論理学 (deontic logic)、選好論理学 (logic of preference, logic of better)。また、記述文において真偽値をもたない文の存在（いわゆる真偽欠落 truth-gap）を認め、そこに新しい論理関係を導入するもの（これは命題の論理学 logic of proposition に対して陳述の論理学 logic of statement といわれることがある）、²¹⁾ 条件の論理学 (conditional logic)、いわゆる存在含意 (existential import, existential implication) について自由な自由論理学 (free logic)、さらには位相論理学 (topological logic) など、②、古典的記号論理学を基礎づける古典的意味論を超える新しい論理的意味論、などである。これらの論理体系が必ずしも自然主義的志向の所産だということではないにもかかわらず、またそれらの存在論的基礎に一定の制約（条件）があるにもかかわらず、自然主義的議論に多大の寄与をしていることは否めないのである。

そうはいっても、そこに当然一連の根本的問題が発生する。すなわち、

(1) われわれが、通常、古典的論理学ないし標準論理学によって理解してきたところのPないしHテーゼは、単なる制限とか補正とかを超えてその意味そのものがずらされ、遷移 (shift) せしめられるのではないかという問題、(2) 従って、その意味では本来のPないしHテーゼを廻る攻防とは異ったレベルで、人々はいわば虚構の議論に巻き込まれるのではないか、といった問題が生じてくる。われわれとしては、この「新しい」戦線は虚構ではなく、切実な意味をもっていると考えてはいるが、本稿ではこのような根本的問題にはほとんど触れることができない。

しかし、従来の方法的一元論といい二元論といい、大まかな立場の表明以上に尽すべき議論が尽されていないこと、今日それぞれの立場の理論上、實際上の諸々のインプリケーションの一端を検査することによって、われわれの当面する諸問題に対してもつそれぞれの意義をもつと明確にする必要があることは、争い難いように思われるのである。

一 註

- 0) 本稿は、同名の既発表論文 (法哲学年報1971年『法的推論』所収) の成稿であって、内容の骨組はほぼ前論文の通りである。ただ前論文では紙幅の関係で割愛した本文の一部と註の大部分を復元して、量的には前論文の2倍を超えるものとなっている。
- 1) Popper, K. R., What can logic do for philosophy, *Aristotelian Society, Suppl. Vol.*, (以下, AS-SV), 1948, p. 154. おそらく周知のことなのだが、参考までにポッパの立場を摘記しておこう。ポッパは方法二元論を、自然的事実 (の記述) と人間の決定 (の定式化) との対立を主張する立場としてとらえ、これを批判的二元論あるいは批判的規約主義 (critical conventionalism) とよぶ。批判的決定主義とよんでもよいであろう。これは、規範の成立を人間によるその設定に託するような規範の起源の理論たることを意図するものではなく、規範的法則の創設にせよ、受容・承継にせよ、改革にせよ、そのような決定に対して、決定をなす当のわれわれ以外には自然にも神にも責任を帰属させえない、という意味で規範は常に人為的 (man-made) であることを主張する。そして (1) ① にかかる決定の基準は事実の中にも事実的法則の中にも見出せず、その意味で決定や規範は事実に戻元しえない。人間は自然の一部ではあるが、決定の基準を自然に課

し、自然の世界に道徳的法決定を導入するのはわれわれ人間であり、決定は事実（を述べる文）からは決して論理的に導出しえない。㊤ ある事実に対して我々がとりうる決定や態度は一意的ではなく、多様である。㊦ 決定の内容と決定の行為とは区別されねばならず、後者のみが事実で、前者は事実ではない。従って決定の行為を述べる文から——当然また、ある規範が何らかの人または社会によって承認されているという事実（を述べる文）からも——決定の内容（を述べる文）を論理的に導くことはできない。因みにこの決定の内容と決定の行為との区別は、陳述の内容と陳述の行為との区別と類比的である。陳述の内容は内心の判断ではなく、外部的事実（客観的意味）であるから、決定の内容もまた決定の内心的状態（欲求とか心的行為としての決定ではなく、外部的事実（客観的意味）と類比的なあるものであり、決定の意味は純粹に表出的（*expressive*）ではなく、何か客観的なもの、つまり規範（*norm*）である。(2)、しかし、決定が一定の効果を意図する筈のものであるかぎり、決定は自然と社会との自然的法則と両立しうるものでなければならない。事実の改変が自然法則に照して不可能であるとか極度に困難であるとすれば、改変の決定は履行不能であり、決定は無意味である。*Open Society and its Enemies*, (以下〔OS〕), 4th & rev. ed., 1962, Vol. I, pp. 57—73.

ところで、狭い厳格な意味で *man-made* ではない、すなわち人間の作為にかかるものではないという点に、法的原則などとは異った倫理的原理の特質を見る観点に立つならば、ポッパーの '*man-made*' という言葉の遣い方は誤解を招きかねないものではある。かかる観点に立てば、倫理的原理は何か発見さるべきものであり、倫理的意思是自己立法的意思であるという観念（*man-made* であるという観念）は不合理なものである。しかしこの場合にも、倫理的に善なる主体は倫理的原理を自由に受け入れ、強制なしにそれに基づいて（あるいはそのために）行為するということを必ずしも否定するものではない。そうした場合この立場は、いかなる原理に基づいて行為すべきかという問題と、ある原理に基づいて行為するか否かの選択の問題とは区別されて然るべきであるとし、後の問題に人間の自由と良心の基盤を見ようとする点で、ポッパーと共通の地盤に立っているのである。

- 2) ヒューム・D. 『人性論』大槻春彦訳（岩波文庫）第四分冊，33—4頁
- 3) Poincaré, H., *Dernière Pensée*, 1912, p. 225 ; Hare, R. M., *The Language of Morals*, (以下〔LM〕), 1952, p. 28.
- 4) 以下に述べる方法二元論をめぐる論争のやま場は1963—65年にあたるが、戦後いわゆる＜哲学的論理学＞というジャンルが活潑に開拓されるようになったのは1950年代の初期以降で、時期としては計算機革命とほぼ平行し、内容か

らすれば計算機革命と対峙する形で進行した。因みに電機計算機の各国保有台数が100台に達したのは、アメリカで1954年、ヨーロッパ全体で56—57年、日本が59—60年であり（北川敏男編『情報科学の動向』I, 1968年, 20頁, 図2.1), 哲学的論理学の呼び水のひとつとなった規範の論理学の研究が国際的に足並を揃えるにいたったのは, 1958年（雑誌 *Modern Uses of Logic in Law* (アメリカ) の発刊, 哲学的論理学の専門誌 *Logique et Analyse* (ベルギー) の発刊, *Archiv für Rechts- u. Sozialphilosophie (ARSP)* (ドイツ) における法論理学論文の急増等) である。他方, この論争を直接刺激した要因としては, 哲学的論理学の発展と呼応する形で, 1949年から1962年にかけて, イギリス分析哲学の古典 (G. Ryle, P. F. Strawson, L. Wittgenstein, J. L. Austin) が, 踵を接して出揃ったことを看過できない。これらの動向を規定した動機は基本的には論理実証主義ないし論理経験主義の克服であり, 論理実証主義から論理経験主義への展開過程が基本的には論理的意味論の発展によって嚮導されたのと同じように, ここでもまた本質的には新しい論理的意味論の導入によって嚮導されたのである。

- 5) Russell, B., On denoting, *Mind*, (以下 MD), 1905, rep. in : *Logic and Knowledge*, p. 39 ff.; Strawson, P. F., On referring, [REF], MD, 1950 ; Russell, Mr. Strawson on referring, MD, 1957 ; (Freg, G., Sinn und Bedeutung ; do.,)

論争のすぐれた批判的整理として, Linsky, L., *Referring*, [REF], esp. pp. 85—99 ; なお, cf. Hudson, W. D., *Modern Moral Philosophy*, [MMP], 1970, pp. 19—63 ; Searle, J. R. (ed.), *The Philosophy of Language*, [PL], 1971, Editor's Introduction. またストローソンの着想に沿った新しい論理体系の構築についてはファン・フラッセン (Van Fraassen) の一連の研究がある。それらは *Journal of Philosophy* 1966 ; *Journal of Philosophy* 1968 ; Lambert, K. (ed.), *The Logical Way of Doing Things* ; Van Fraassen, *Formal Semantics and Logic* に収められている。

- 6) Black, M., The gap between 'Is' and 'Should'. [I-S]. *Philosophical Review*, (PR), 1964., rep. in : Hudson, W. D. (ed.), *The Is-Ought Question*, [IOQ], 1969, pp. 99—113.
- 7) この暗喩を（定義が前提に加えられる場合を除いて）ヘアーも正面から用いている。Hare, [LM], pp. 32—33. ところで, この暗喩はカントの分析命題の定義「主語概念に述語概念が含まれる。」(Kant, I., *Kritik der reinen Vernunft*, [KRV], B, s. 10 ff) に由来するけれども, しばしば指摘されるように（例えば, Benett, J., *Kant's Analytic*, p. 7 ff.）, カントの定義は

分析命題の定義としては余りに狭すぎ、ここで問題になっている暗喩に比較しても更に窮屈である。実際カント自身も分析命題を二様に定義しており、他の個所 ([KRV], B, s. 191.) では、「(無) 矛盾律をあらゆる分析的認識の普遍的かつ十全な原理として承認しなければならない。」と述べている。つまり、分析的命題は自己矛盾を犯すことなしには否定しえない命題である。以下、カントに論及する場合には、〈分析性〉の定義としてこの定義を終始採用することにする。

- 8) これは述語論理における妥当な推論である。別の例を加えておくと、関係論理を用いて同様に、「馬は動物である。」から「馬の頭は動物の頭である。」も推論できる。
- 9) Frankena, W. K., *The naturalistic fallacy*, (NF), MD 1939, pp. 468—69.
- 10) ヘアーのいうところの自然主義である。Hare, R. M., [LM] p. 81 ff. ; do., *Freedom and Reason*, pp. 16, 186 ff.
- 11) cf. Robinson, R., *Defition*, p. 59 ff, p. 149 ff.
- 12) ヘルスター (N. Hörster) は、方法一元論としての自然主義を批判してこの本文のように述べている。Hörster, N., *Zum Problem der Ableitung eines Sollens aus einem Sein*, [ASS], ARSP 1969, s. 17. ところで「規約的定義からの推論では大前提がそもそも価値語に対する意味の規範的指定となるから、推論全体はその仮装した規範的命題に依存することになる。」という言葉は好意的に理解した場合二様に解釈できる。一つは、最も自然にこの場合定義は規約であるから、価値語に対する意味指定が規範的であり、従って推論全体はその意味で規範的大前提に基くことになる、という意味に、二つには、大前提は価値語の意味の定義であるにも拘らず、自然主義的推論では倫理的評価的言明として扱われるのであるから誤謬である、という意味にである。後者のような誤謬、すなわち定義と規範的評価的原理との混同が自然主義的誤謬の一つであると指摘したのはムーアである。Moore, G. E., *Principia Ethica*, pp. 9, 19 また、本文で後述のトゥールミンの立論の基礎にこの種の誤謬が潜んでいることを指摘したのはヘアーである。Hare, [LM], pp. 46—49. では二つの解釈のうち何れがヘルスターの解釈かといえば、前者である。このことは本文の続き、本質的定義からの推論に対する彼の立論と比較すれば明らかである。そうだとすれば、ヘルスターは自然主義を批判するに自然主義的誤謬をもってしたのである。何故なら第一の解釈に立てば、自然主義批判に当って、定義と倫理的評価的原理を混同しているからである。
- 13) Moore, G. E., *Principia Ethica*.

- 14) Frankena, [NF]
- 15) Hare, [LM], p. 91.
- 16) この型の命令 (あるいは規範) 推論の形式化 ($!p \cdot !(p > q) \supset !q$, $!p (p > !q) \supset !q$. あるいは $Op \cdot O(p > q) \supset Oq$, $Op \cdot (p > Oq) \supset Oq$) の妥当性については争いがあるが、ここでは触れない。守屋正通「法の論理学」(八木鉄男編『現代の法哲学理論』所収) 204頁 註 (14) を参照していただきたい。命令 (ないし規範) 推論の可能であることについては今日争いはない。
- 17) 前掲拙稿参照。
- 18) 尤も <遵守値> そのものは、④ 非常に複雑な概念で取扱いに不便なこと、⑤ 命令文の意味値として強すぎるように思われること、⑥ もしこれを弱めて <履行値> と同じように扱えば「Pを実現せよ。 $\therefore P$ 」といった不合理な推論を認めねばならないこと等、いくつかの難点をもっている。cf. Rescher, N., *Logic of Command*, [LC], p. 58; Castanêda, *Imperative reasonings*, [IR], *Philosophy and Phenomenological Research*, (PPR), 1960-61, pp. 27-8. また言明論理からの修正 (いわゆる意味遷移 meaning-shift) によって命令推論を説明することは有効であるが (cf. Rescher, [LC], p. 88), しかし、平叙論理と全く平行的・類比的であるとする (cf. Hare, *Imperative Sentences*, MD 1949; do., *Some alleged differences between imperatives and indicatives*, MD 1967) のは問題があろう。しかしこのことも、命令 (ないし規範) 推論が不可能であることを意味するのではない。

ここで念のため、<意味値> (Semantical Value) について説明しておこう。よく知られているように、平叙論理、つまり真偽値によってその妥当性を評価する平叙文の間の論理関係では、 S_1 から論理的に S_2 を推論することが可能であるということは、 S_1 が真ならば S_2 も真であることを意味する。ここでは前提から結論へと<真>という値がいわば搬送され、結論が真でなければ前提も真でありえないという関係が保たれるのである。このような関係の体系を対象とするのが形式論理学である。(本註では便宜のために演繹論理を例にとって説明するが、必要な修正をほどこせば論理学全体について同様のことがいえるのである。) このような関係が何故必要かといえ、諸科学において、前提によって結論を正当化したり、結論の真偽をテストすることによって前提の真偽をテストすることが必要であるからである。前提と結論との間に上のような関係が存在すれば、結論が偽ならば前提も偽である。もしこのように真偽値を忠実に搬送する関係が様々な場合に明確になっていなければ結論を正当化したり、前提をテストすることは不可能である。

同様に、命令文等の推論の妥当性を検定するためには、妥当な推論に

よってどのような値が前提から結論へ搬送されるか、つまり意味値を適切に析出しなければならない。規範論理では、極く単純化していえば、〈正しい〉という値が搬送されると考えてよい。例えば、ある行為をなすべきであるという言表「Op」からその行為をなすことが許されているという言表「Pp」が推論されるが、「Op」→「Pp」（‘Op’ 故に ‘Pp’）では「Op」が正しいなら「Pp」もまた正しいという関係が成立するのである。命令推論についてもこのような意味値を析出する試みがいろいろなされているが（例えば、I. Kant, J. Jorgensen, A. Hofster and C. C. McKinsey, A. Ross, R. M. Hare, P. T. Geach, A. N. Prior, T. Storer, H. S. Leonard, H-N. Castaneda, N. Rescher, etc.），規範論理における程の意見の一致は見られず、なお百家争鳴の感がある。それはともかく、例えば〈履行値〉というのは、前提命令の内容が履行されれば結論の命令の内容も履行されるという形で命令推論を説明するための意味値なのである。注意すべきことは、採用する意味値によって、実はある推論が妥当となったり非妥当となったりすることであって、意味値の析出によって最大の難問は何処に推論の妥当性の基準をおくかという問題である。

ところで、規範推論や命令推論が〈正しい〉〈正当化されている〉〈合目的である〉といった意味値で説明されるとき、規範や命令の〈正しさ〉はその背景となる一定の目的の体系、目的を達する手段、因果関係や経験則、あるいは規範体系や手続の約束、さらにはいろいろのレベルでのコンヴェンションとか社会通念、様々の行為の選択の期待可能値等を基準として測られるものであるから、推論の背景を形成する文脈の要素として、これらの要素や条件ができるかぎり明瞭な形でセットされている必要がある。これらの要素はすべて総合的言明で表現され、従って実際にに前提なり結論が正しいか正しくないかは総合的判断によってなされる。にも拘らずある前提が正しいならば、結論も正しいという妥当な推論そのものは分析的な法則によって表現される。このさい、実際の正否と意味値としての正否値とは区別することが重要である。

確立された論理法則のような分析的命題は、推論のいかなる段階においても任意に導入、消去でき、見方を変えれば、あらゆる文脈において恒常的要素としてストックされているのである。従って、最も基本的な形でのいわゆるトポス (topos) なのであり、このことは、恒真命題 (T) に関する吸収律 (命題 P と T との連言は P と等値であり、選言は T と等値である) に表現されている。

しかし、文脈の要素が固定されていることを前提するのだから論理学は本来的に保守的なものだと考えることは誤っている。何故なら、妥当な推論の

結論をテストし批判することは前提の正しさをテストし批判することであり、かくして論理学は文脈のあれこれの要素に対して正確に接近し、批判してゆくための全くすぐれた武器だからである。論理学をテストの道具として用いることは、科学における論理学のすぐれて合理的な **progressive** な用法であり、このように論理学が用いられなかったということが伝統的法学の最も不幸な特色の一つであると思われる。実際、かの後期イエリンク (R. von Jhering) も、相変らず論理の本性についての誤った観念に捕えられてはいたが、まさに同旨の指摘を行っているのである。Jhering, *Scherz und Ernst in der Jurisprudenz*, 4 Aufl., 1891, ss. 346—7. しかも概念法学のような伝統的法学が論理主義的であったというのは、例の悪名高い「流出論的論理」(emanative logic)と同様、「論理」という語の正しい意味においては一つの謬論なのである。

- 19) Toulmin, S. E., *Reason in Ethics*, 1950, pp. 40—41, 53—56 esp. 148—163 ; do., *The Uses of Argument*, [UA], 1958, p. 94 ff. et passim ; MacIntyre, A. C., Hume on 'Is' and 'Ought', *PR* 1959, §§ 5, 6 ; Hampshire, S., Fallacies in moral philosophy, *MD* 1949 ; Pike, N., Rules of inference in moral reasoning, *MD* 1961 トウルミンに対する批判として, Hare, [LM], p. 46 ff. また本章 註 (12) 参照。
- 20) このような新しい方向にそった最も極端な推論の例の一つが、マヴローズ (G. I. Mavrodes) の推論である。Mavrodes, 'Is' and 'Ought', *Analysis*, (ANA), 1964—65, p. 42 ff. 今、次の四個の文を用意する。㊦「パリはフランスの首都である。」(p), ㊩「人は嘘を言ってはならない。」($O \sim q$), ㊧「パリはフランスの首都であるか、人は嘘を言ってはならない。」($p \vee O \sim q$), ㊨「パリはフランスの首都ではない。」($\sim p$) ㊦ と ㊨ は記述言明であるが、㊧ は規範言明なのか記述言明なのか明瞭でない。そこで、今 (i), ㊧ を規範言明とすると、 $[p] \rightarrow [p \vee O \sim q]$ 。また (ii), ㊧ を記述言明とすると、 $[(p \vee O \sim q) \cdot \sim p] \rightarrow [O \sim q]$ 。「 $O \sim q$ 」は明らかに規範的言明であるから、(i), (ii) の何れにおいても記述的言明から規範的言明を論理的に導くことができることになる。もっともマヴローズの推論は、たしかに意表をつく議論であるが、実際の議論では不毛であることが容易に判る。① この推論では「 Oq 」は全く任意に指定しうる。② 同一の議論で ㊦ と ㊨ とを共に用いることは不可能である。当然のことながら、自己矛盾を含む不整合な前提をもつ推論への P ないし H・テーゼの適用は意味をなさない。
- 21) 例えば、トウルミン、リンスキーなどは、「陳述の論理学」を「命題の論理学」に対比させて用いている。cf. Toulmin, S., *The Uses of Argument*, p. 182 ff., p. 260 ; Linsky, L., *Referring*, p. 99,

二 ポアンカレのテーゼに対する反例 1)

以下では、ポアンカレのテーゼに適合し、形式的に妥当な推論をP標準型、ヘアーのテーゼに適合し、形式的に妥当な推論をH標準型とよぶことにする。

一 ギーチ第一推論 (1958)

ポアンカレのテーゼに対する反例として、まず次のようなギーチの推論をとりあげよう。

大丸は京都最大の百貨店である

∴ 京都最大の百貨店に行くべきならば、大丸に行け。¹⁾

(以下、G₁推論とよぶ。)

この推論の原型は元来ヘアーにより提出されたものである (1952年)。²⁾ すなわち、

大丸は京都最大の百貨店である

∴ 京都最大の百貨店にゆきたい (want) ならば、大丸にゆけ。

(以下、H推論とよぶ。)

ヘアはこのH推論も妥当なように思われると述べているから、彼はPテーゼの適用をH推論のような仮言的命令 (hypothetical imperative) を結論とするものではなく、定言的命令 (categorical imperative) を結論とする推論に限定したと見ることもできる。しかし、彼はH推論についてもP・Hテーゼを貫徹すべく、次の三個の解釈を試みた。①、結論の条件節の内部を命令文と解する。すなわち、‘want’は心的状態の記述をするのではなく、命令を表現するための論理語 (neustic) として機能すると解する。³⁾ この解釈が受け容れられれば、P標準型に変形できる。⁴⁾ ②、結論の仮言的命令を意味の上で平叙文に等しいものと解する。すなわち、結論は前提の繰返しであり、前提に含まれる情報を繰返して与えるにすぎない。ヘアーによるとカントは、仮言的命令は命令ではあるが分析的であって、命令としては (qua imperative) 内容をもたない、と述べているからである。⁵⁾ これが認められるとH標準型に変形しうる。③、この推論全体

をメタ言語的分析と解する。すなわち、「真なる前提『大丸は京都最大の百貨店である』から、妥当な命令『京都最大の百貨店に行きたいなら、大丸に行け』が推論できる。」と同義である、と解する（この場合にももちろん、‘want’を命令の *neustic* と解した上での話であろう）。もしこの解釈が許されれば、対象言語レベルにおける命令性はメタ言語によって被覆されてしまう。⁶⁾ この最後の試みは、ポッパーの試みの変形と見うるが、⁷⁾ その当否は別として、成程これにより二元論に対する反対を交すことはできるにせよ、もはやPないしH標準型への還元も問題にならない。

ところでギーチは、ヘーの ① の解釈、すなわち結論の条件節内部を命令とする解釈を二つの方法で批判する。それによると (1), 条件節の内部では命令文も命令の性質を失うから、‘want’を変装した命令の *neustic* と理解しても無駄である。(2), H推論の結論は形の上で仮言的命令であっても、真の機能は「あなたは京都最大の百貨店に行きたいか？」という疑問と「大丸に行け。」という命令の連言にすぎないから、P標準型に還元できない、といわれる。⁸⁾ ギーチの批判の第二点には疑念が残るが、たしかにヘーの解釈 ① には牽強附会のきらいがある。

また、ヘーの解解②については次のように考えられる。まず、この解釈におけるカント理解は十分でない。何故なら、カントが仮言的命令は命令として常に内容をもたない、つまり、常に命令性を失って単に記述的機能を担うにすぎない、⁹⁾ と解したとは考えられないからである。¹⁰⁾ またこう解すると、仮言的命令「 $p \supset !q$ 」(Pならばqをなせ)を前提の一つとする仮言的三段論法「 $(p \supset !q) \cdot p \vdash !q$ 」(Pならば!q. しかるにP. よって!q)の可能性を、「 $p \supset !q$ 」が記述的情報媒体にすぎないからPテーゼに反するという理由で否認しなければならず、他方「 $p \supset !q$ 」が分析的であるという理由から、Hテーゼに反する「 $p \vdash !q$ 」(p. よってqをなせ)という推論を認めねばならぬことになるだろうが、これは自己矛盾であろう。¹¹⁾ 何れにせよ、仮言的命令は分析的命令と解せざるを得ないとすれば、常に妥当であって、常に推論の結論となりうることは争いえないであろう。¹²⁾

従って、この仮言的命令をH推論の結論として卒直に受け入れた方がよいであろう。とすれば、仮言的命令や仮言的規範を結論とする実践的推論にPテーゼの適用が全面的にはできないことを認めねばならない。ヘーのようH推論においてもPテーゼを認め、しかる上で結論の命令性を否認すれば、かえってPテーゼの性格を曖昧にし、稀釈するであろう。

二 ギーチ第二推論 (1958年)¹³⁾

大丸は京都最大の百貨店である。

∴ 京都最大の百貨店にゆくな、あるいは大丸に行け。

(以下、G₂推論とよぶ。結論は二つの命令の選言である。)

これもPテーゼに一つの制限を課するものである。ギーチはこれを証明するために二個のThemataを用いる。ここでThemataというのは、ある妥当な推論から他の妥当な推論を与えるところの、ストア論理学に由来する一群の変形規則である。彼の用いるThemaの一つは「 $p \cdot q \rightarrow r // p \rightarrow \sim q \vee r$ 」で、「京都最大の百貨店は大丸である。京都最大の百貨店に行け。∴ 大丸に行け。」(Themaの前半「 $p \cdot q \rightarrow r$ 」に当たるP標準型)に適用するとG₂推論(Themaの後半「 $p \rightarrow \sim q \vee r$ 」に該当する)が得られる。他のThemaは「 $(p \vee \sim p) q \rightarrow r // q \rightarrow r$ 」で、「大丸に行かないか、大丸に行け。大丸は京都最大の百貨店である。∴ 京都最大の百貨店に行くな、あるいは大丸に行け。」(同様にThemaの前半「 $(p \vee \sim p) q \rightarrow r$ 」に当たるP標準型)に適用するとやはりG₂推論(Themaの後半「 $q \rightarrow r$ 」に該当する。)が得られる。

しかし、これらのThemaが平叙推論のみでなく命令推論にも適用しうるか否かを争うこともできよう。¹⁴⁾ また、たとえ適用しうるとしても、G₂推論の結論は前提が真なる文脈では分析的であり(たしかに京都に不案内な人には、結論の命令のみをもってすれば、京都最大の百貨店は大丸ではないかのような誤った情報さえ与えかねない代物ではあるが)、たしかに命令ではあるが、前提が真(総合的に真)なる文脈ではいかなる行為によっても履行されうるし、されざるを得ないような命令であるから、語の真の意味において命令とは解せられない。すなわち、ある行為者にある確定した行為の指針を与

え、彼がその命令に従うか否かの選択をなしうるような命令ではない。¹⁶⁾ いわば「何でもよいから出来ることをせよ。」という命令に全く等しい。したがって冒頭のポッパーの言葉にもあったように、このような恒に妥当する命令を結論とする命令推論は、P テーゼを真に意味あらしめようとするれば、P テーゼの適用から除外するのが適當であろう。

三 ブラックの推論 (1964年)¹⁶⁾

AはBを王手詰めにしたい (want)。

Bを王手詰めにする唯一の指し手は女王を動かすことである。

∴ Aは女王を動かすべきだ (should)。

(以下、B推論とよぶ。)

これはカントの仮言的命法の分析に全く合致する一例である。この種の推論で問題となるのは次の諸点である。

(i) ブラックによると、大前提における ‘want’ は決意を表明する一人称の ‘want’ ではなく、三人称のそれであるから、大前提は事実命題であり、B 推論は (妥当なものとして) P テーゼによって規律できない。¹⁷⁾ しかしヘアーはこの点を争う。¹⁸⁾ (1), 彼は前述の如く、この ‘want’ は心的状態の記述ではないと主張し、次の二文の比較を求める。(a)「もし君がスープに砂糖を入れたいなら、給仕に頼むべきだ。」、(b)「もし君がスープに砂糖を入れたいなら、糖尿病検査を受けるべきだ。」ヘアーによると、(a) と (b) の相違は、(a) は目的と手段との関連に立脚し、(b) はそうではないこと、そして (b) における ‘want’ は心的状態の記述であるが、(a) における ‘want’ は心的状態の記述ではない点にある。ヘアーの真意は次のように解釈できよう。(a) における ‘want’ の意味論的機能は主体が践行的言語行為 (performative utterance, 註 (17) 参照) を為す立場にあることを示すことにある、と。それゆえ、(a) における ‘want’ は践行的意欲の事実を、(b) における ‘want’ は感性的生理的事実を表現する、といえよう。

さてヘアーは、(b) における条件的助言の後件は前件肯定によって絶対

的に（つまり定言的に——守屋）分離しうるが、(a)における後件の絶対的分離はできない、と主張する。もしそうだとすればB推論も不可能であるが、これは疑問である。一つには、(a)の場合に「砂糖が欲しいか否かに係りなく給仕に頼むべきだ。」というのが不合理であると同様、(b)の場合「砂糖が欲しいか否かに係りなく糖尿病検査を受けるべきだ。」というのは不合理であろうから、¹⁹⁾ その意味で、(a)と(b)とを区別することはできないからである。

ところで、B推論の前提における報告から、行為者AはBを王手詰めにすることを意欲し、明示的にこれを表現した場合「私はBを王手詰めにしたい。」という践行的言語行為をなす立場にあることが推定できるが、B推論では、話者がAの意欲に同意しているか否かについては曖昧である。この点を問題視しなければならないと思われる理由はこうである。例えばいまXがYに「もしあなたがZを殺したいなら、殺すべきだ。」とか、「私が一億円入手する唯一の手段は私の被相続人たるあなたを殺すことだ。私は一億円入手したいのであなたを殺すべきだ。」といった場合、これらの推論が分析的に真だからといって、推論の結論「あなたはZを殺すべきだ。」とか「私はあなたを殺すべきだ。」とかを冷静に受け容れることはYにはできないからである。さてヘアーによると、このような場合推論がXサイドで行われるのであればともかく、Yサイドの推論として行われる際には後件の分離ができない。後件の分離ができるのは、前提の主語の指示する主体（この場合には話し手X）の意欲に聞き手（この場合にはY）ないし話し手（B推論の場合の話者）が積極的に同意している場合のみである。²⁰⁾ 仮言的命令を分析的であると考えるにもかかわらず、仮言的命令では後件が絶対的には分離しえない、というヘアーの真意はここにある。そして、このことからヘアーは、当事者の同意不同意は道德の問題であるばかりか、論理学の問題だと主張する。²¹⁾

かくてヘアーは、〈意欲をもつ〉ことは内言的に〈一人称現在形の一つの命令を言う〉ことであり、B推論でAが「Bを王手詰めにしたい」

ということはAが「『Bを王手詰めにしよう Let me mate B』と内言的に言う」ということだと考える。この命令にB推論の話者が同意することは「AをしてBを王手詰めにさせよ Let A mate B」という命令を内言的に言うことであり、そしてこの命令こそB推論の真の前提である、と。何故なら、この命令を前提すればB推論において話者サイドで後件を安んじて分離しうるからである。このように解すれば、話者がAの意欲に反対することは、とりもなおさず「Let A mate B」という彼自身のさき程の内言的命令に反対すること、すなわち「Don't let A mate B」という命令を言うことなのである。

(2) このヘアーの巧みな工夫に対してもいくつかの疑問が可能であろう。①、仮言的命令が分析的であると解するヘアーが前件肯定で後件を分離しえないと考える理由は、ただ、仮言的命令の目的に、例えば、話者の側で同意しえないからである（同意のない場合には定言的に後件を分離することはできず、前提に含まれる仮言的命令を結論において繰返しうるのみである。〔WANT〕, p.50)。だとすれば、話者の立場で後件が分離しえても、行為者が話者の目的に同意しえない場合には同様にして行為者の立場では後件の分離ができない筈である。B推論では行為者Aが当の目的を意欲することが明示されているから、ヘアーが主張するような、「Let A mate B」を前提とする話者サイドの推論では終始Aも亦同じ目的に同調していることを当てにできるが、糖尿病のケースではどうであろうか。もし患者が糖尿病検査を意欲しなければ後件は分離しえない筈ではなかろうか。B推論では話者の同意不同意が曖昧であったとすれば、ここでヘアーの提唱する推論では行為者の意欲についての曖昧さが生れ、さらには行為者の意欲の積極的な無視が行われることになる。かくて、論理は両サイドで等しくなければならないという要請は全く充足されないことになる。②、もっと重大な疑問は、第一の当事者が第二の当事者の意図に、したがって第二当事者サイドの推論に反対する場合、第一の当事者はヘアーのいうように第二当事者の推論の前提そのものに反対するのだろうか、という疑問である。ある人

物XがYに「私は一億円入手したいが、そのためには被相続人たるあなたを殺す他はない。だから私はあなたを殺すべきだ。」と語っているとして、Yはこの推論の前提（Xが一億円を入手したいということ、そして、そのためにはYを殺す以外に途はないということ）に最初から無条件に反対しうるだろうか。そうではなくて、Yは結論に反対するが故に、つまりまず以て後件を分離するが故に、前提にも反対せざるをえないのである。一億円の個人所得を禁止する社会規範でもない限り、最初から無条件に前提に反対しうるわけではない。²²⁾ この異論に対しては、Yが反対している結論はXサイドの推論の結論であり、Xサイドの推論については後件が分離しうることをヘアーは認めているのであるからヘアーの立論に抵触しない、と抗弁しうるかもしれない。しかしそこに重大な区別がかくされているのである。Xの説明を聞いてYは理解できなかったらうか。もし理解できないとすればYはXの推論は論理的に（ヘアーの意味ではなく、本来的な意味で論理的に）妥当でないと抗弁するであろう。だから後件を分離しえたのはまさにその後件に反対すべきYその人でもあり、後件を分離しないで後件に反対することは論理的不可能事である。Xサイドの推論を理解できなかったならば、Xに何をもって反対すべきかを定めえないであろう。²³⁾ それ故その意味においては、B推論においても後件の分離が可能であろう。また、当事者の現実の同意不同意は推論の妥当性とは別個の次元の問題であるから、別に処理されねばならない。²⁴⁾

(ii) 命令を与えるとか、命令に従うといった意思行為の間に論理的関係は存在するであろうか。妥当な平叙推論の場合には前提を主張して結論を否認することは論理的に不合理である、と伝統的に理解されている。²⁵⁾ しかし実践的推論においては、最終的な理由を構成する前提を肯定したとしても、結論に従って命令を与えないとか、命令に従わないことは一個の意思行為であって、論理的に不合理であるとはいえない。意思行為そのものを推論することはできないからである。このことは、ある行為からその行為の前提条件としての他の行為、例えばある人の離婚からその人の結

婚を論理的に導きうることを否定するものではないが、一般的にいて命令の授容は論理的に正当化されうるが、論理的に導かれえないのであり、換言すれば、命令行為はその正当化から論理的には帰結しないといつてよい。命令や助言の論理は命令等の意味内容には関与するが、命令等の授容の行為には関与しない。²⁶⁾

このような理由でブラックは事実的前提が＜べし＞結論を論理的に含意 (entail) するといふ言い方には気が進まず、この場合には潜在的 (latent) 必然性とか実質的 (virtual) 必然性といった言葉でその関係を表わした方がよい、と述べている。²⁷⁾

平叙的推論と実践的推論とのこの相違こそ、ブラックによると、実践的結論は事実的前提からは導かれえないという主張を理解する助けとなる。しかしそれは推論能力や言語の理解能力の欠陥の問題ではなく、もはや道徳的欠陥の問題である。ともあれ平叙推論と違って、実践的推論にあっては事実的前提と実践的結論の授容との間には当事者の自発性によつてのみ架橋されうる一種の間隙がある。この間隙が一旦埋められるや否や、すなわち、一たび人が（例えば倫理的）実践に入ることを選択すれば、人は妥当な実践的推論の結論を命令等として与え、あるいは受け容れねばならない。それ故ブラックによると、事実的前提によつて論理的に正当化される結論そのものについては選択の余地はない。合理的に引き出されうる道徳的助言の可能性は只一つである。正当化は論理的必然性において行われるのである。

(iii) 次の問題は、B推論が実践的前提の省略された省略推論 (enthymeme) にすぎないかどうか、である。もし省略推論であれば前提を補うことでP標準型となる。補足さるべき前提は例えば「誰しも、他の事情が同じならば、(ceteris paribus 条件。後述本章四を参照。) 実現することを欲することを実現するための唯一の手段をとるべきである。」である。²⁸⁾ ここで注意すべきことは、実践的結論を有する推論は適当な前提を補いさえすれば常に形式的に妥当なP標準型にすることができるのであるから、ad hoc

に都合のよい非分析的前提を加えてはならないことである。²⁹⁾

さてブラックによると、(1)、この補足された前提は分析的であるから消去できる。³⁰⁾ つまり、なくても推論の妥当性に影響を及ぼさないのである。(2)、また仮に分析的でないとしても、B推論の妥当性に反対する理由があるとすれば、B推論の前提を前件とし結論を後件とする文（すなわち補足された前提）の妥当性にも反対しなければならない。この前提を補えば推論の形式的妥当性を保証しうるが、この手続きは推論の妥当性の問題を前提の妥当性の問題に移し代えるのみである。

しかしブラックの(2)の議論は説得的ではないように見える。今B推論の事実的前提を「 $p \cdot q$ 」、結論を「Or」とすると、B推論「 $p \cdot q \rightarrow \text{Or}$ 」(p 、そして q 、故にOr)が妥当でないから、「 $q \supset (p \supset \text{Or})$ 」(q ならば、 p ならばOr)が非分析的でなければならないということは、もし「 $q \supset (p \supset \text{Or})$ 」が暗黙裡にか明示的にか文脈に含まれていて、これを前提として補うことが許されてさえいれば全く問題がないからである。その前提を補えばむしろ「 $\{q \supset (p \supset \text{Or})\} p \cdot q \supset \text{Or}$ 」(でき上った推論全体)は分析的である。ブラックの議論がもつともなのは前提「 $q \supset (p \supset \text{Or})$ 」の妥当性がここでは争われて、これを前提として補うことが許されない、という点にある。そうだとすればこの場合B推論の妥当性を認めない非自然主義者はこれをP標準型に直すことを許されない。しかし、これは非自然主義者の一貫性をそこなうものでは決してないのである。その意味で、(2)の議論はB推論が妥当であることを豫め仮定しているのであって、(1)の議論のみが有効であろう。

(iv) カントに遡りうる議論であるが、あらゆる〈熟練の命法〉は仮言的である、というべきか。すなわち(1)、B推論の結論は「定言的」であるが、これは「もしAがBを玉手詰めにしたいと望むなら」という条件節を補充すべきものかどうか。あるいは(2)、このような文脈で用いられる‘should’は可變的条件をその意味の一部として含んでおり、(α)「Mをなすべきである。」は(β)「もしEの実現を望むなら、Mをなすべきである。」とその意味で同義だと解すべきか否か。³¹⁾ (1)については既にい

くらか触れるところもあったので (i) 参照), ここでは (2) について検討するが, (α) と (β) とが同義だとすると, (β) の中の 'suould' は今度は何を意味するであろうか。ブラックによると ①, もし (α) と (β) の中の 'should' が同義ならば無限後退を惹起する。②, もし 'should' が (α) と (β) とで異った意味をもつなら, (β) の前件肯定で定言的 <should> を分離しえなくなるであろう。前提と結論とで 'should' の意味が異ってくるからである。³²⁾

① の議論は明らかである。② において, (α) と (β) とで 'should' が異なることは, ハリスンが主張するように (註 (11) 参照) (α) が B 推論の結論となりえないとすれば, 不都合ではない。ブラックは (β) から後件分離ができないのは不合理だ, と主張するのであるが, ブラックは (β) の後件の定言的分離の可能性をまずもって仮定しているわけである。

だが何れにせよ, (1) (2) の問題は, 文脈と前提とを区別すべきことを示唆している。というのは, 結論は前提が真ないし妥当である文脈に拘束されるという <条件の論理> を認めれば,³³⁾ 上の対立は解消するからである。文脈の要素 (ここでは, 行為者が E の実現を望んでいるということ) は結論の中で繰返される必要はなく, また繰返されると悪循環を招く。B 推論の結論は「定言的」に分離できよう。³⁴⁾

(V) この推論では確定的な助言 (actual advice) が与えられるのか, それとも仮の助言 (prima facie advice) が与えられるのか。換言すれば, あらゆる事情を考量した上で助言がなされているのか, それとも制限された文脈での, 場合によって優越的な助言 (や規範) によって排除 (overrule) されうる仮の助言がなされているのか。³⁵⁾ 'should' のそのような制限された文脈での用法は, その文脈のもつ性格によって通常明らかとなるような仕方で特定される。その文脈はゲームのそれである場合もあり, 法律的文脈や道徳的文脈である場合もある。

ところで (1), 一つの文脈における「A を為せ。」と他の文脈における「A を為すな。」とは矛盾するであろうか。ここには明らかに主題や論点の

変更が含まれているから、両者は矛盾しないといえる。³⁶⁾ もし両者が矛盾するならば、前提が真ないし妥当である一つの閉じた文脈においてすら指図的 prescriptive な結論を導くことは不可能となろうし、前提が双方で真ないし妥当であり、かつ相反する結論を導く二個の文脈を発見することが常に可能とすれば、凡そ結論を導くこと自体不可能となろう。(2), しかし二個の文脈の評価的な優劣によって、劣位の文脈における義務ないし助言が、優位の文脈におけるそれらによって排除されうるということは別の問題であり(但し、一つの文脈における「Aを為せ。」と他の文脈における「Aを為すな。」とは論理的に矛盾しないという(1)の結論を予想 presuppose している、ことに留意しなければならない。何故なら、(1)の結論を肯定しなければ(2)におけるこのような問題は成立する余地がないからである。), また問題になる義務や助言は特定文脈においては確定的でありうるが、もし文脈の枠を外せば、すなわち開放文脈では仮の義務や助言でありうる。従って、義務や助言が確定的な意味で用いられる限り、開放文脈では一見「定言的」ないかなる義務や助言も *ceteris paribus* 条件(「他の事情が等しいならば」、「事情に変更がない限り」という条件)を伴っているといえよう。³⁷⁾ 例えばカントのいわゆる熟練の規則や怜悯の助言は、その目的を受け容れない者には向けられない性格のものであるが、これも *ceteris paribus* 条件を伴っているものと見なすことができる。³⁸⁾ (3), ただ、推論が行われる際に、当の推論全体が何れかの当事者によって暗黙裡に別の文脈に置かれるかもしれないし、何か暗黙の前提が附加されるかもしれないが、当事者相互の諒解を絶するような暗黙の仮定はもちろん議論の客観的力とはなりえない。従って、B推論においても文脈の確定は不可欠であるが、文脈を全くチェスのプレーに限定する限りB推論によって確定的助言が導かれうる。さもなくば、B推論の結論はたとえチェス・ゲームを舞台としてさえ確定的には導かれず、仮の助言でしかありえない。

(vi) 少し見方を変えて、(1), 事実的前提が真なところの一個の適切な文脈においてはそれらの前提は実践的結論の決定的理由((ii)参照)とな

りうるとしても、混合文脈（それらの文脈のすべてで与えられた前提が真であるような混合文脈）においても結論は前提から決定的に導かれうるであろうか。例えばアイスホッケーで、「是が非でも勝て」という態度と「ゲームの精神に従え」という態度の衝突を考えた場合、ゲームの文脈と倫理的な文脈との間に、ブラックが想定する程の硬い区別があるかどうか。³⁹⁾ (2), (1) の系として事実的前提群が真であり、しかも当事者が相互にそれらを認知している道徳的文脈そのものが、事実的前提群が真である点でのみ重なり合っている複数の文脈を含んでいるときはどうか。これは道徳的文脈の全体論的な開放性から特に考えて見る必要がある。⁴⁰⁾ 推論がどのような文脈に置かれているかについてのこのような曖昧さを差当り <語用論的曖昧さ (pragmatic ambiguity)> と呼んでおきたいが、このような曖昧さは避けられないのではないかと思われる。このような曖昧さを出来る限り合理的に処理することが語用論の一つの重要な課題であろう。

ただここで二つのことに注目しておこう。①、語用論的曖昧さは前提と結論との関係の曖昧さではなく、前提がいかなる文脈を決定するかの曖昧さであるから、語用論的曖昧さに対処するには、① 異なる文脈の間の選択肢を尽すこと、② 文脈を十分明確に決定しうるように前提を選定することが必要である。⁴¹⁾ しかし、一定の価値選択をなすべく選定の基準を設けることは語用論の仕事ではあるまい。②、(vi) において問題としているのは仮の <べし> ではなく、飽くまでも確定的 <べし> である、ということである。

このように考えてくると、ブラックは実践的推論の前提の中に、① 目的と、② その実現にとって必要十分な条件が含まれていること、さらに③ それらが当事者によって相互に認知され、前提に関する限り語用論的曖昧さと、当事者の授容の曖昧さ（註(27)参照）が取除かれている場合を想定し、⁴²⁾ これらの要件が満たさされれば、特定の確定的な（それ故少くとも仮の）指図的結論を事実的情報により論理的に正当化しうることを主張している、と解される。そして、行為の選択が問題となる場合には、目的と

か手段に対する当事者の承認ないしコミットメントを区別し、それらの組合わせによって場合を分けて議論する必要がある。しかし、前提において授容の曖昧さや語用論的曖昧さを取り除くという要請は、事実的前提に加えて潜かに指図的前提を導入することを意味しないであろうか。この点で参考になるのが次の「サール (J. R. Searle) の推論」をめぐる論争である。とりわけ、B 推論がチェスという特定の制度を前提している点でサールの推論と軌を一にしており、興味深い。⁴³⁾

二 註

- 1) Geach, Imperative and deontic logic, [IDL], *Analysis*, (以下, ANA) 1956—58, p. 53.
- 2) Hare, [LM], pp. 34—35.
- 3) Hare, [LM], pp. 34, 37. 'want' が実は内言的命令であるという主張は, Hare, *Wanting: Some pitfalls*, [WANT], 1968, rep. in: *Practical Inferences*, [PI], p. 44 ff. でより詳細に展開されている。

ところで、いま言表「あなたはドアを閉めようとしている。」と「ドアを閉めよ。」とを比較すると、ヘアーによれば、二つの言表に共通する要素と相違する要素がそれぞれの言表に含まれている。共通する要素は、「今すぐあなたがドアを閉めること」というどちらの文によっても言及されている近い将来の事態であり、相違する要素は、その事態に対して話者が言表しようとする態度である。前の言表ではその事態が起ることを主張する態度が、後の言表ではその事態を起させようとする態度が表明されている。ヘアーはこの共通の要素をそれぞれの言表の *phrastic*、異った要素を *neustic* とよぶのである (ヘアーは [LM] より前の論文では、これらの要素にそれぞれ 'descriptor', 'dictor' の語を当てていた)。ヘアーはかくて、前の言表を「今すぐあなたがドアを閉めること、その通りである。」というように、また後の言表を「今すぐあなたがドアを閉めること、どうぞ。」というようにパラフレーズする。こうすればまた、言表の形式化にも便利である。いま、さき程の *phrastic* を「p」であらわし、主張と命令の *neustic* をそれぞれ '⊢', '!', という演算子であらわすと、前の言表は「⊢p」として、後の言表は「!p」として形式化しうるからである。本稿でもこの形式化を利用している。

- 4) ヘアーに従って H 推論を書き換えると、

大丸は京都最大の百貨店である。

∴ if 京都で最大の百貨店にゆけ, (then) 大丸に行け。

となり, この推論は移出入律 $(p \supset (q \supset r)) \equiv (p \cdot q \supset r)$ によって, すぐ

大丸は京都最大の百貨店である。

京都で最大の百貨店にゆけ。

∴ 大丸にゆけ。

という P 標準型に変形できる。

- 5) Hare, [LM], pp. 34, 37 ; cf. Kant, I., *Grundlegung zur Metaphysik der Sitten*, [GMS], B, ss. 45, 51.
- 6) Hare, [LM], pp. 37—38. ヘアが実際にこのようなメタ言語的分析を試みているのは, 「やりたければ, やってみな。(俺は責任を持たない—あるいは, 反対だ—が.)」とか「出来るものなら, やってみな。(お前には出来ないに決っている。)」のように, 皮肉を表現したり, 反意を強調するような命令形についてである。発言者は実は「やってみよ。」という命令には留保ないし反対をしているので, 定言的命令の要素は脱落し, あるいは被覆されているからである。私はここでこの分析を拡張して適用しているので, ヘアに関する限り適切な処理ではないかもしれない。しかし, いずれにせよ, メタ言語では, 「もし云々ならば大丸に行け。」と命令しているのではなく, この命令文について述べているのだ, ということが要点である。
- 7) Popper, [OS], Vol. I. p. 234. n-5. ヘアの分析とは異って, ポッパーの分析には, メタ言語の文「『京都で最大の百貨店に行きたければ, 大丸に行け。』は妥当な命令である。」から対象言語の命令「京都で最大の百貨店に行きたければ, 大丸に行け。」を推論しうる, という議論が含まれている。すなわち, 意味論的概念「真である」の定義 (いわゆる <タルスキの等置式> Tarski, A., *The concept of truth in formalized language*, in : *Logic, Semantics, Metamathematics*, p. 155.) と類比的な「妥当である」の定義「 $'p'$ は妥当である $\equiv !p$ 」を用いて, 「 $'p'$ は妥当である」という文から「 $!p$ 」を推論しうる, という。このようにしてポッパーは, 意味論的事実 (一種の事実) から命令 (あるいは規範) を推論できる, と論じているのである。無論これは, 非意味論的事実から命令ないし規範を導きうるという意味ではない。

少し脱線するが, ポッパーのこの分析に対しても早くブライアー (A. N. Prior) の批判がある。Prior, *Logic and the Basis of Ethics*, 1949, p. 68 ff. この批判は二つの部分から成っているが, その一つで, ブライアーは規範の意味値として <遵守値> を採用しているので, 少なくともこの部分の批判は有効でない (第一章註 (18) 参照)。第二の批判についてはここでは

触れない。

- 8) ギーチの (2) の解釈は次のような意味である。例えば「もしお望みならば、マッチは机の上にあります。」という文が「マッチは机の上にあります、(定言的言明) — あなたがお望みかどうか判りませんが。」と同じであるように、「もし京都で最大の百貨店に行きたければ、大丸に行け。」の「もし (if)」は、疑念あるいは逡巡を表わす「もし」で、命令は「大丸にゆきなさい、— もっとも、あなたが行きたいのかどうか、私は知りませんが。」と同じ意味であると。この種の 'if' の意味の指摘は、Austin, J. L., *Ifs and Cans*, [IF], in: *Philosophical Papers*, [PP], pp. 210—213. に見られる。cf. 'If', in: *The Oxford English Dictionary*, それにしても、ギーチの (2) の解釈には疑念が残る。やはり仮言的命令と解するのが自然であろう。
- 9) たしかにヘアーは、仮言的命令は命令ではなく本当は平叙文である、というなら誤解を招くと断っている。[LM], p. 36. しかし H 標準型に還元するためには、相当の無理を覚悟で、命令性を消去して、平叙文としなければならぬであろう。だから他方で彼は、仮言的命令は「ただ情報を搬送する意図でのみ用いられている。」と言う。ヘアーの解釈はどうもすっきりしない。
- 10) 問題は三つ程ある。まず (1), 分析的仮言命令は命令性を失って、単に記述的情報の媒体でしかない、とカントが考えたかどうか。私は否定的に解する。カントが理性の命令を問題にする場合常に少くとも一つの前提がある。すなわち、人間は不完全な理性的存在であって、一時の感性的衝動・激情・傾向性によって理性の目的を見失い、あるいは(経験的ないし理性的)目的に対する合理的手段を見失うことのある存在だ、という前提である。従って、この見地からすれば、定言的命法にせよ仮言的命法にせよ、「かく為せ。(かく為すべきである。)」という理性の命法を意志の課題として意志の原則たらしめ、命法を命法たらしめるのは、理性が行為者の激情や傾向性を完全に制御しえず、行為者の行為に対して決定的影響力を欠く限りにおいてである。[GMS], B, s. 51n, ss. 37, 113. et passim. 命令を命令たらしめるのは命令の内容の総合性ではないから、分析的命令といえども命令性を失うことはない、と解される。(2), カントに従えば、仮言的命法は常に命令として内容を欠くと考えられるか。この点に関しても私は否定的に解する。成程カントは、「私が仮言的令法を一般に (überhaupt) に考えてみると、私はそれがどんな内容を含むかをあらかじめ判るわけではない。」と述べている。しかしこれには一つの但し書きがついており、「私にその命法の条件 (つまり目的) が与えられるまでは、」その内容が何であるかわからない、というのである。[GMS], B, s. 51. 仮言的命令について、ペイトン (H. J. Paton) の一般的原理と特殊原理の区別を援用すれば、「欲求

された目的に対する最も効果的な手段を用いるべきだ。」という一般の原理はそれ自体としては無条件的であり、特殊な目的への欲求によって条件づけられてはいない。目的という語はその実現に必要なかつ十分な手段をも含意する。これに反してその適用としての特殊原理は条件的である。Paton, *Categorical Imperative*, p. 95. つまり、一般的仮言的命令は成程命令として分析的である上に内容も分析的であり、その意味で内容をもたないが (cf. Hare, [CM], p. 175), 特殊な目的への適用である特殊の原理は総合的内容をもつ、と解する方が、カントの原意にそっていると思われる。事実、(特殊の) 仮言的命令は分析的であるというとき、それは命令性に関してのみ分析的なのであって、仮言的命令の内容に関しては、つまりある特定された目的に対して何が不可欠の手段であるかは、総合的言明によってのみ把握する。では (3), 仮言的命令は果して常に分析的であろうかこの点についても私は否定的に解する。まず「仮言的命令」という用語はカントにあっては一つの術語であって、目的—手段の必然的連関を前提とする手段たる行為の命令のみに用いられることに注意しておこう。従って例えば「顔を洗ったらすぐ朝食にせよ。」のような命令はこの名で呼ばれない。後者の型の命令を以後「条件的命令」と呼ぶことにするが、条件的命令はいうまでもなく主命令が分析でない限り分析的ではない。ところでカントは、周知のように、仮言的命令について次のような分析をしている。「目的を欲する者は、(理性が彼の行為に対して決定的影響をもつかぎり、) また彼の自由になるところの、その目的のために不可欠の手段をも欲する。この命題は意欲に関して分析的である。…… (掲げられた意図のための手段そのものを決定することには勿論総合的命題が属している。しかしこの命題は意志の活動を実現するための根拠にではなく、客体を実現するための根拠に関係している。)」(傍点守屋) と。[GMS], B. ss. 44—45. すなわち、仮言的命令はいわば意味値としての〈意欲値〉に関して分析的である (おそらくこの指摘は、命令論理の意味論的分析の先駆的工作の一つといえよう)。さて、目的一般ではなくある目的とその不可欠の手段とを E と M とで表わすことにする。すると、問題なく分析的な命令は「E を欲するならば、E をなせ。」である。E を意欲する者は当然 E を意欲するし、E を意欲することなくして E を意欲することはできない。しかし理性的存在者に対しては命令として全く眼目を欠いている。では「E を欲するならば、M を為せ。」という命令は、これと同じ意味において分析的であろうか。M を実現することなくして E を実現しえないこと、また、E を意欲する者は E に関して M を意欲すべきだということ、は確かである。しかし、E を意欲する者は当然 M を意欲するであろうか、また M を事実意欲することなくしては E を意欲しえないであろうか。まず (イ)、E と M と

の正しい因果必然的連関を知る者と知らない者 (MがEの不可欠の手段たることを認知する者としからざる者) とでは異なるであろう。従ってこうである。EとMとの正しい因果的連関が議論の前提において与えられた文脈では当の仮言的命令は分析的であろう。そしてこの文脈では、「Eを欲するならMを為せ。」というのは、完全な理性的存在者に対する (命令として内容もっているが) 命令としての眼目を逸している。しかし、EとMとの正しい連関が与えられていない文脈では総合的である、と考えられる。この場合さきの命令は完全な理性的存在者にとってすら眼目を失してはいないであろう。「京都最大の百貨店が大丸である」という情報Iをあらかじめ与えられていないニューギニア高地人にとって、「京都最大の百貨店に行きたいなら、大丸に行け。」という命令Cが何を意味するかを考えてみていただきたい。これに反して情報Iがあらかじめ与えられている際には (H推論では前提においてこの情報が与えられている)、命令Cは分析的であり、すべての理性的な人に対して命令としての効力をもたない。その限りでH推論の結論を分析的とするヘーの見解に一致する。(ロ) 私はさき程「Eを意欲するものはEに関してMを意欲すべきだ。」といった。しかし、一般に「Eを意欲するものはMを意欲すべきだ。」といえるであろうか。例えば、E₁の不可欠の手段Mが同時に、反価値的な目的 (ないし結果) E₂の手段でもありうる時、E₁を欲するが故にMを欲すべきであろうか。この意味においては、E₁とMとの必然的因果連関が認知せられた文脈においてすらも、仮言的命令は一般的には分析的ではありえないのである。

このようにして、ヘーのカント解釈には平明さが欠けていると思われるのであるが、仮言的命令では、条件節と主節とで命令がいわば互に打ち消し合うから分析的である、というヘーらしくない弁明を読むとき (Hare, [LM], p. 37), その感を一層深めるのである。

- 11) (1), 「 $p > !q$ 」を記述文 (と類似のもの) として扱えば, 「 $(p > !q) \cdot p \rightarrow !q$ 」はPテーゼに反するので認められない。他方「 $p > !q$ 」を分析的とすれば上の仮言的三段論法は「 $p \rightarrow !q$ 」に等しいから、これも認められない (a)。しかし、「 $p > !q$ 」が分析的に妥当であれば、「 $p \rightarrow !q$ 」が成立つ (b)。これ ((a) (b) を共に認めること) は自己矛盾である。(2), しかし、ヘーが自己矛盾を犯しているという非難は当たらないかもしれない。いま少し検討してみよう。④ たしかに、首尾一貫しないと思われるのだが、彼は仮言的命令の命令性を留保し、しかも条件節の内部を命令と解するのであるから、さきの仮言的三段論法は「 $(!p > !q) \cdot !p \rightarrow !q$ 」となり、自己矛盾は生じない。だが彼の議論全体と接合するとき説得力を欠く。⑤, ハリスン (J. Harrison) はいう。「定言的命令と仮言的命令との相違は、その名が示すような形式上の相

違なのではない。もし形式上の相違にすぎないとすれば、前件の満足された仮言的命令に基いて、行為すべき定言的（普通この場合 ‘categorical’ を用いるが、ハリスンは慎重にこの語を避けて ‘positive’ を用いている。これについては後述のヘアーの立論をも参照）な義務をもつことになるだろう。……しかし、われわれが仮言的義務をもちえない理由はないし、仮言的義務がわれわれの利害や傾向性に対して条件的であってはならない理由もない。」と。Harrison, *When is a principle a moral principle?*, *AS-Suppl Vol.*, 1954, p. 119 彼はまず私のいう条件的命令とカント的な仮言命令を区別し、条件的命令とは異り仮言的命令では仮言的三段論法（いわゆる *modus ponens*）によって定言的命令を分離できない、と主張しているのである。ヘアーもこれに同意する。Hare, *[WANT]*, pp. 45—46. 従って次のようになる。 $[(p \supset q) \cdot p] \rightarrow [!q]$ は成立たないから、本文に述べたような矛盾は生じないと。しかし ①、仮言的命令に限って後件の命令を *positive* に分離しえないと果して言えるであろうか。条件的命令でも同様の議論ができるのであり、例えば、「顔を洗え。」と「顔を洗ったら朝食にせよ。」とから「（顔を洗ったかどうかにかかわらず）朝食にせよ。」は帰結しない、といわれる。cf. Castaneda, H-N., *Imperative and deontic logic*, *[IDL]*, *ANA*, 1958—60, p. 43—44. （例文は変えた。）だから、条件的命令と仮言的命令を論理学上区別する理由はないように思われる。両者は共に論理的には〈条件の関係〉にぞくし、〈含意の関係〉から区別される。また ②、日常われわれはしばしば仮言的命令の後件を分離して用いる。③、真の問題点はむしろ、「朝食にせよ。」という命令を「顔を洗おうと洗うまいと朝食にせよ。」と読むことが論理的に支持しえない、という点なのである。その意味で、分離された後件（つまり結論）を〈categorical〉と称することは誤解を招き易い。詳細は後述の〈ブラックの推論〉について見ていただきたい。また前掲拙稿204頁、註(15) 参照。(3)、参考までに私の見解をまとめておこう。④ 後件分離の可能性を認め、 $[(p \supset q) \cdot p] \rightarrow [!q]$ を認める。しかし、結論 $[!q]$ は前提 $[(p \supset q) \cdot p]$ が妥当である文脈によって拘束され、その意味で無条件に妥当するのではない。⑤ $[(p \supset q) \cdot p] \rightarrow [!q]$ の前提 $[p \supset q]$ を、（仮言的命令の意味値の十分ではないが必要な要素としての行為者の意欲値——但し、行為者の現実の意欲と混同されてはならない——に関して）総合的な命令と解する。目的と手段との連関が予め与えられていないからである。従って、推論 $[p] \rightarrow [!q]$ は成立たず、本文で述べたような不整合は生じない。但し、H推論の結論は既に述べたように分析的と考える。

- 12) 分析的言表を後件とする含意文 $(p \supset T)$ は恒真である。前件が妥当である文脈で分析的な言表、を後件とする条件文 $(p \supset T)$ はその文脈において論

理的に真である。推論「 $p \rightarrow T$ 」が成立つ。但し、分析的言表を「 T 」とする。

13) Geach, [IDL], p. 55.

14) ギーチによると、命令には一定の未来時称の平叙文が一例えば、「顔を洗え。」に対して「君は顔を洗うだろう。」が一対応し、この平叙文が真となることは命令の履行に相当するから、命令推論は命令文の〈履行値〉を意味値として（真理値を意味値とする平叙推論と平行的に）説明することができ、結局、命令の推論は未来時称の平叙文の推論に還元しうる。このように解することにより **Themata** の命令推論への適用可能性を説明する。このような試みの難点については既に触れた（第一章註 (18)）。ギーチ自身も躊躇を示している。

15) cf. アリストテレス『ニコマコス倫理学』1112^a, 1140^a

16) Black, M., [IS], p. 102. この型の推論は、既に少なくとも1961年までにカスターネダにより P テーゼに対する反例として提出された。Castanêda, [IR], PPR 1960—61.

17) ブラックがここで念頭においているのは、オースティン (J. L. Austin) の、‘performative utterance’ (践行的言語行為) と、‘constative utterance’ (記述的言語行為) との区別である。cf. Austin, J. L., *Performative utterances*, in : id., *Philosophical Papers*, p. 233 ff. ; id., *How to do Things with Words*, [HTD], p. 4 ff. 後者 (記述的言語行為) においては記述的な主張のために、前者 (践行的言語行為) にあっては、記述的主張をなすこと以上のために、言語が用いられる。後者では使用された文の意味が事実に対応しない、すなわち真でないという理由で非難されうるが、前者ではそうでない。真または偽な主張をするのではなく、いわば他者とある関係を取り結び働きかける意図のもとに言語が使用されるからである。言語の使用は、践行的言語行為では、ある行為の一部であるか、行為そのものである。例えば「私はしかじかの約束をする。」というのは、私が約束しているという事実を主張する以上のこと、すなわち約束という行為を行うことである。践行的言語行為が明示されるのは（すなわち、オースティンの用語で、‘explicit’ performative であるのは）、主語行為が一人称現在能動形の平叙文で表現されたときである：「私はしかじかの約束をする。」これに対応する三人称（二人称）の文—例えば、「オースティンはしかじかの約束をした。」—は、主語の指示する主体が践行的言語行為をなしたという出来事 (episode) を報告するために用いられる。cf. Black, M., *Austin on Performatives*, 1963, rep. in ; K. T. Fann (ed.), *Symposium on J. L. Austin*, [SYMP], p. 401 ff. それ故「Xはしかじかの約束をした。」

は「Xは『私はしかじかの約束する。』といった。」と同義である（但し、Xは一人称ではない）。——このような同義の定式を「オースティンの同義式」と名づけておく。（もっとも、オースティンの〔HTD〕のテーマは **performatives** と **constatives** との二分法を彼自身放棄し、一そう適切な、**locution, illocution, perlocution** の三分法に置き換えることだった。第四章参照。）

従って、ブラックが事實的言明と非事實的言表とを区別する場合、彼の真意はこうである。言明は、それが經驗的に真または偽であり、踐行的な側面を全くもたないとき事實的であり、言表がはっきり踐行的側面をもっているとき非事實的である。人が踐行的言表をなすとき、彼は真または偽であることを言っているのではなく、それ以上のことを為しているのであり、為していると考えている。cf. 〔IS〕, p. 104 従ってまた、事實的言明から非事實的言表が導かれるということは、換言すれば、記述的言語使用から踐行的言語使用が導かれる（？）ということであり、しかも「論理的に導かれる」とか「推論が妥当である」ということは、例えば「相手を王手詰めにする唯一の手段は女王を動かすことである」といい、しかも、それが女王を動かすべきでない理由だということは、不合理（**absurd**）である。」ということである。「もしわれわれが、人がこのように言うのを聞けば、われわれは彼がうっかり口を滑らせたか、冗談を言っていると考えるべき理由をもっている。……あるいは、彼は自分の言っていることを理解していないと結論することも許される。」〔IS〕, p. 109.

この議論には検討すべき重要な問題点があるが、以下の本文ではその検討を避け、ブラックのもっと表向きに議論の紹介と検討とに重点をおいている。ただ若干のコメントは必要かと思われる。ブラックの議論から次のような疑問が生ずるであろうからである。(1), 記述的言語行為と踐行的言語行為の区別は伝統的な事実と評価ないし指図、規範との区別とはずれていないか。したがってブラックのテーゼは、伝統的に〈ヒュームのギロチン〉の肯定ないし否定によって主張されようとしたこととは直接関係がないのではないか。(2), B推論における前提と結論の関係は、〈ヒュームのギロチン〉の中で想定されている論理的含意（**entailment**）とは異った関係ではないか、といった疑問である。(1) に関してのみ触れると、事実、コーヘンはブラックのテーゼとヒュームのギロチンとは問題がずれていると主張する。Cohen, E. F., 'Is' and 'Should': An unbridged gap, 〔IS〕, *PR*, 1965, pp. 222—3. しかし、学問的實際的必要にかかわらず不動のテーゼを想定する必要はないのであって、学問上實際に一定の必要があれば、テーゼを修正・変形・再定式することは許されるのではあるまいか。またそのこと

によってヒュームのテーゼの意味も却ってより精細に理解できるのではあるまいか、と思われる。

- 18) Hare, [WANT], pp. 44—51.
- 19) ヘアーが (b) において絶対的に後件分離ができると考えたのは、(b) の発言では病気の原因と兆候との間の因果関係が勧告の合理化の根拠であるということから、(b) の〈if〉を因果的条件の〈if〉と取り違えたためかもしれない。因果的条件文では通常、前件肯定で後件が定言的に分離しうるといわれているからである（これは疑問であるが）。しかし、(b) そのものは因果関係の言明ではなく、飽くまで条件的勧告で、論理的には「顔を洗ったら朝食にすべきだ。」と同じであろう。
- 20) Hare, [WANT], p. 48.
- 21) Hare, [WANT], p. 45. なおヘアーの〈論理学の特殊分野としての倫理学〉という観念に注意。「論理学の特殊分野としての倫理学は、『私は何をなすべきか?』という形の疑問に答えるさいの道案内としての倫理的判断の機能にその存在を負っている。」Hare, [LM], p. 172. 但し、ヘアーの場合「倫理学」(ethics) というのは、一般にはメタ倫理学 (meta-ethics) といわれている分野を指示する術語なのである。Hare, *Ethics*, in : *Essays on the Moral Concepts*, p. 39.
- 22) かくして前提に反対する場合、Xの目的に反対するか、目的と手段との関係に抗弁するかの何れかであるが、通常は目的について反対がなされることになる。
- 23) 混乱の原因は何処にあるのか。ヘアーは「文 P から文 Q が論理的に導かれる」(P entails Q) ということを次のように定義する。「人が P に同意して (assent) Q には同意しない (dissent) という事実は、彼が何れかの文を誤解しているということの十分な基準であるとき、そしてそのときにのみ、P から Q が論理的に導かれる。」[LM], pp. 25, 172——以下、これを「H 定義」とよぶ。この定義は平叙論理と命令論理の両方における ‘entailment’ の定義として意図されたもので、‘assent’ の定義は両論理で区別されている。「われわれがある陳述に真剣に同意するのは、その陳述を真であるとわれわれが信ずるとき、そしてそのときのみである。」「われわれがある命令に真剣に同意するのは、話者がわれわれに告げたことを為すか、あるいは為すことを決意して、機会が到来したとき履行するとき、そしてそのときのみである。」[LM], pp. 19—20 これらの定義はすでにカスタネダによっても批判されており (Castaneda, [IR], pp. 28—33), また、〈ヘアーの逆理〉といわれるものの原因となっているのであるが、それはそれとして、ここで触れないのは、定義中に表われる「同意」「不同意」という語は現実の

(actualな) 同意・不同意を意味するのではありえない、という点である。ヘアーはH定義を平叙論理にも適用するのであるから、平叙論理でまず考えてみよう。例えば「すべての遊星はチーズの球である。だから月はチーズの球である。」は前提が現実には偽であるにも拘らず推論として妥当である。前提を真とすれば（ヘアーの定義に即していえば、真と信ずれば）結論も真である（われわれが、文意を誤解していないかぎり、真と信ずるに足る、あるいは信じなければならない）からである。勿論我々はこのような議論を科学的目的には使わない。だが、「何故、何の目的で、推論をなすか？」という問題と、「何故、果して、推論は妥当であるか？」の問題とは混合されてはならないことも明らかであろう。前者では、前提や結論が実際に真であるか否かが主とし問題であり、後者ではそうではなく、仮に前提を真とすれば（すなわち、前提に〈真〉という価を割り当てれば）結論も真であるか（結論にも〈真〉という価を割り当てうるか）どうかの問題である。そして、前の問題は後の問題を前提している。〈実際の同意〉と〈同意値〉とは混同されてはならない。命令論理においても同然である。

全く奇妙なことに、ヘアーは1949年の論文で論理学の問題が後者の問題であることを強調している。「(命題) 論理学は主として、命題の真であることにではなく、推論の妥当性に関心をもつ。云々。」Hare, *Imperative sentences*, rep. in: [PI], p. 18 それのみか [LM] においてすら、「選択や行為を導くためには、倫理的判断は次のようなものでなければならない。もし人がそれに同意すれば、その判断から論理的に導かれる命令文にも同意しなければならない。」([LM], p. 171. 傍点守屋) と述べている。その彼が他方では本文に述べたような議論をし、また同じ [LM] のあい前後する個所で「前提が受け容れられなければ、結論は引き出され (be drawn) えない。」([LM], p. 165 傍点守屋), と主張する。これは矛盾しており、実際には、前提を受け容れなくとも、結論は引き出されうるのである。高々いいうることは、妥当な推論では、前提を受け容れれば結論を受け容れねばならず、結論が受け容れられなければ前提も受け容れられない、ということであり、しかも結論が導きえないならば、結論を受け容れたり、拒んだりすることはむろん意味をなさないのである。何故ヘアーがこのような矛盾を犯すにいたったかは興味ある問題であるが、これは一連のもっと根本的な問題をよびおこすので本稿では割愛する。

- 24) 〈意欲 wanting〉に関しては、これがいわゆる〈私的言語 private language〉(Wittgenstein, L., *Philosophische Untersuchungen*, [PU], 1953, § 243 ff.) であるかどうかという別の問題がある。ノーマン (R. Norman) は、「言語の公共性」というヴィットゲンシュタインのテーゼ (cf. [PU],

§ 261) に基いて、17—19世紀の功利主義のみでなく、ヘアー、ノーウェル・スミス (P. H. Nowell-Smith), ゴーティエ (D. P. Gauthier) 等の当代風の功利主義にもまつわる唯我論を否定し、功利主義の超克を試みている。Norman, *Reason for Action*, 1971. B 推論も当然批判の対象となりうるが本稿では割愛する。

- 25) この見解についてはストローソンの批判がある。cf. Strawson, P. F., *On referring*, MD, 1950. 本文で次にブラックが「潜在的必然性」と呼ぶ関係はストローソンの見解とほぼ同調している。
- 26) cf. Rescher, N., *The Logic of Commands*, [LC], pp. 8—9
- 27) Black, [I S], p. 110 指図的 (規範的) 議論の当事者の間に存在する曖昧さを、ここでは〈授容の曖昧さ〉、あるいはダンカン・ジョーンズにヒントを得て〈epistemic ambiguity〉とよんでおく。cf. Duncan-Jones, A., *Assertions and commands*, [AC], *Proceedings of the Aristotelian Society*, [PAS], 1951—52, p. 202 この曖昧さの処理の仕方は、倫理規範、法規範、命令、要求、助言、勧告、強制等々によって異なるであろう。カスタンエダは命令推論について次のような要請をおく。「命令がその中心的基本的様式で用いられる時には、行為者と命令の使用者の双方が共に賛成しているような、諸目的の階層的複合体と約束された諸手続を背景として用いられる。」Castanêda, [I R], p. 44 (傍点守屋) このような要請は倫理的文脈では問題なく受け入れられうるものではあるが、助言 (この場合には、助言の使用者が行為者の目的に賛成しないことがありうる) や強制 (この場合には、行為者が強制的命令の使用者の目的に賛成しないことを含意する) 等の場合には受け入れ難い要請となる。

ところで、このような曖昧さは可能性としてはかなりの程度に達する。今、ある目的に対する一人の人の態度を受容、非受容 (中立)、否認の三つの場合に分けると、二人の人間では $3^2=9$ 通りの態度の組合わせがある。このうち二人が共通の態度をとる場合を共軛的關係、全く反する態度をとる場合を反共軛的關係、その他を非共軛的關係、総称して共軛關係とよぶと、共軛的關係は三通り、反共軛的關係は二通り、非共軛的關係は四通りとなる (三人であれば共軛關係は 3^3 通りあることはいうまでもない)。このような共軛關係の可能性を念頭におき、実際に命令・強制・要求等の各様態でどのような共軛關係が問題になるかを考察しつつ、epistemic ambiguity に対処しなければならない。

- 28) 実際にブラックが提示している補足前提には ceteris paribus 条件 (他の事情が等しいならば、という条件) が欠けている。その場合には補足前提は必ずしも分析的ではないので、本稿では ceteris paribus 条件を補充して

分析的な前提に変えてある。しかし以下の本文では、厳密に言えば補足される前提として「AにとってBを王手詰めにする唯一の手段は女王を動かすことであれば、もしAがBを王手詰めにしたいならば、Aは女王を動かすべきである。」を使っている。この前提を補うと、B推論は「 $\{q \succ (p \succ \text{Or}) pq\} \rightarrow [\text{Or}]$ 」という形になる。これは妥当な推論である。本文では都合で条件関数詞 (\succ) の代りに含意関数詞 (\supset) を用いた。

- 29) すべての実践的推論に対してPテーゼが成立つことを証明するためには、まず実践的推論をPテーゼに適合するものと、適合しないものとに分類することを可能ならしめる基準と手続が定められねばならない。今もし実践的推論の前提に *ad hoc* に都合のよい非分析的前提を加えるという手続が許されれば、すべての実践的推論はP標準型になるのであるから、この手続は証明の手続きとして不当なものである。何故ならすべての実践的推論をただ一つのクラスにまとめ、分類の境界の一方にのみ振り分ける基準は分類の基準とならないからである。分類の基準が妥当であるためには他方のクラスにも少なくとも一つの実践的推論を入れることを原理的に許すものでなければならない。そして、それでもなお実際にはいかなる妥当な実践的推論をPテーゼに従うときにのみPテーゼは普遍的に妥当なものとして証明されたことになる。したがって *ad hoc* に前提を加えることを許すことはPテーゼの証明にはならないで、論点先取となる。省略推論に加えることのできる前提や結論は、暗黙にすべての当事者に諒解されているか、省略されていても状況により十分推定しうるものでなければならない。

ところで、*ad hoc* に前提を加える手続はPテーゼを擁護し、その上、新しい価値ないし規範が歴史的に生成、創造されることを主張する自然主義(マルクス主義やプラグマティズム)をたたく手段として屢々用いられるのであるが、もしこのような非自然主義者の「論証」を認めるとすれば、新しく生成したいかなる価値もすでに存在した価値であるというナンセンスな主張を認めねばならなくなろう。我々はだからといって事実から価値が論理的に導かれうることを主張するのではない。価値や規範が事実によって検査され、サポートされうること、そうされねばならぬことを主張するのみである。我々は「自然主義」の主張をこのような形で理解したいし、価値の存在被拘束の意味もこのような理解で十分だと、今のところ考えている。この点の詳細については、第四章を参照していただきたい。

- 30) 恒真式に関する連言の吸収律「 $p \cdot T \equiv p$ 」による。補足される前提をヘアーは分析的であるとするが、後件は分離しえないという。Hare, [WANT], p. 49. ヘルスターはこの前提を総合的と考え、このような前提を補足することなしにはB推論は成立しないとする。Hörster, [ASS], s. 33. 私は分析的

で、後件を分離しうると考える。

- 31) オースティンがいうところの〈意味の補完〉と〈意味の分析〉に当たる。Austin, [I F], p. 214 ff.
- 32) (α) と (β) のそれぞれにおける 'should' を should_1 , should_2 としよう。すると、推論は「もし p ならば $\text{should}_1 q$. しかるに p . よって、もし p ならば $\text{should}_2 q$ 」となり、定言的 should を分離しえない上に、きわめて paradoxical な形となる。
- 33) 条件規範を形式化する際に、(古典的) 数理論理学の枠内で処理しようとして、長らく実質含意の馬蹄形 (\supset) が用いられてきた。例えば A , ロスは条件規範を実質含意で形式化して, 「 $O(p \supset q)$ 」(p ならば q をなすべきである。) と 「 $O(p \supset \sim q)$ 」(p ならば q をしてはならない。) の二つの条件規範は, p を実現しないことによって同時に履行しうる, と主張するのであるが (Ross, A., *Directives and Norms*, p. 172), しかし, 条件 p を実現しないことは決してこれらの規範を遵守することを意味しない。ロスのような見解が可能であるのは, 条件規範を実質含意で形式化したためであるが, 〈条件の論理〉は実際には古典的数理論理学の枠内では処理できない。
 ここで参考までにストルネッカーによって示された条件論理の意味論的モデルを部分的にスケッチしておこう。①, モデル構造 $\langle K, R, \lambda \rangle$: ①, K はすべての可能世界の集合。②, R は K 上で定義される 〈世界の相対的可能性〉の関係。③, λ は不合理世界。④, このモデル上に設定された選択関数 f : 条件文の前件 A と現実界 α とに対して, A が真である特定の可能世界を選択する。—— $f(A, \alpha)$ の値は A が真である可能世界。⑤, 条件文の意味規則: $A \supset B$ は, もし B が $f(A, \alpha)$ で真ならば, α で真である。 $A \supset B$ は, もし B が $f(A, \alpha)$ で偽ならば, α で偽である。Stalnaker, R. C., *A theory of conditionals*, in: *American Philosophical Quarterly*, Monograph No. 2, 1968, p. 98 ff.; cf. Stalnaker, R. C. and R. H. Thomason, *A semantical analysis of Conditional logic*, *Theoria*, 1970, p. 23 ff.
- 34) 条件文から後件を分離する場合, 結論は無条件に妥当するわけではない。しかしその条件を結論で繰り返す必要もない。前提は推論の文脈を (少なくとも部分的に) 確定するが, 確定された文脈の要素 (条件) は文脈にいわばストックされ, その文脈において結論は妥当する。
- 35) 確定的義務 (actual duty) と仮の義務 (prima facie duty) とを区別したのはロス (D. Ross) である。Ross, D., *The Right and the Good*, p. 19 ff.; do., *The Foundations of Ethics*, p. 84 ff.; cf. McCloskey, H. J., *Meta-Ethics and Normative Ethics*, 1969, p. 220 ff..
- 36) アリストテレス『形而上学』第四巻 1005b 20以下参照

- 37) このような場合、選択や選好は「全体論的 (holistic) な」性格をもっている。cf. von Wright, G. H., *The Logie of Prefereuce*, p. 29 ff. また法解釈方法論における諸「矛盾 (?)」の多くはこの次元の問題である。これらの諸矛盾については、Vgl. Engisch, K., *Einführuug in das Juristische Denken*, s. 156 ff.
- 38) 以上の観点から見た場合、カントの仮言的命法は分析的であろうか。結論的にいうと、確定的助言が問題になる限り、仮言的令法はすべての場合に分析的ではなく、仮の助言についてのみ常に分析的である、と考えられる。
- 39) Phillips, D. Z., *The possibility of moral advice*, [MA], rep. in: Hudson. [IOQ], p. 15
- 40) コーヘンはこの点に触れて、「個人の目的や欲求は、彼が道徳的になすべきこととは大部分無関係である。」とブラックを批判している。Cohen, M. F., 'Is' and 'Should': An unbridged gap, *PR*, 1965, p. 220
- 41) 結論に合わせて前提を選ぶという意味ではないから注意していきたい。
- 42) ブラックは事実的前提から指図的結論を導く可能性は倫理的推論にも拡張しうると述べている。[I S] p. 112. しかし彼の議論が主としてチェスの制度的文脈で行われていることは疑いない。cf [I S], p. 109 この可能性を倫理的な文脈に拡張することはもちろん疑問である。というのは拡張しうるとしても一定の確立された倫理的コンヴェンションを越えて拡張しうとは思えないからである。
- 43) ブラックは彼の立論を次のようにまとめている。「実践的あるいは践行的言語使用と、その言語使用をなすための事実的理由との間の関係の一般的なパターンを次のように説明することが許されるであろう。すなわち、すべてではないがいくつかの践行的言語使用のケースでは、その言語の正しい用法を支配する何らかの約束 (convention) の指示に従って、一定の事実的条件が成立すれば、問題になっているようなタイプの、決まった、特定の践行的言語を用いることのみが正当なものとして (properly) 許される。」[I S], p. 112 (傍点守屋)

(未完)